

IKUBUNDO

DEUTSCH-
JAPANISCHES
WÖRTERBUCH

DEUTSCH-JAPANISCHES
WÖRTERBUCH

独和辞典

編集主幹
富山芳正

郁文堂

IKUBUNDO
DEUTSCH-JAPANISCHES
WÖRTERBUCH

1987年2月 第1版 発行 ©

郁文堂 独和辞典

1989年2月 第3刷

編集者代表 富 山 芳 正

発 行 者 大 井 敏 夫

発 行 所 株式会社 郁 文 堂

113 東京都文京区本郷 5-30-21 東大正門前
電話 (03) 814-5571 郵便振替 東京 3-14981

整版・印刷 研 究 社 印 刷 株 式 会 社

落丁乱丁などの不良品はお取替えいたします
許可なく複製・転載することを禁じます

ISBN 4-261-07165-7

序

学生・研究者・実務家を問わず広範囲にわたる使用者の、多面的な要求に十分応えられるだけの豊富な内容、しかしあまり嵩張らぬ、少なくとも携帯の便を失わない程度の手頃な形態——この言わば二律背反をなんとか調和しようというのが、本書において私たちの意図したところである。

辞書の使用価値は、なんと言っても採録語彙の多寡に大きく左右される。収載語はなるべく多いに越したことはない。それにどの言語も、語彙の一部は時代の推移と共にかなりの変化を受ける。今日のようなテンポの速い時代には殊にそうで、ドイツ語でも戦後三四十年の間に、あらゆる分野にわたっておびたしい数の新語が鑄造され、或いは外国語が移入されて、その相当多数が一応定着した。新しく辞書をつくる以上、これらの語をできるだけ採り入れようとするのは当然であろう。と同時に、現代ではほとんどもう用いられなくなった古語・廃語の類いも少なからずでてきてはいるが、或る程度古い文献への対応も求められる独和辞典としては、古語・廃語だからといって一概に切り捨てるわけにはいかない。また、本書の主たる対象はもちろん標準的なドイツの書き言葉であるにせよ、Umgangssprache や方言・俗語にもそれ相応の配慮が必要である。これらの点を考慮に入れながら、主要参考文献表に掲げた諸資料に基づいて精選の結果、本書は総数 10 万 9800 余の見出し語を採録した。

本書における記述の体裁そのものには、格別目新しいところはないと言ってもよからう。中型の独和辞典としては初めて見出し語の綴り字にその分け目を示す符号を付したこと、中型辞典では割愛されがちな語源にもかなりのスペースを割いたこと、比較的多数の図版を挿入したことなどを、挙げれば挙げうるにすぎない。思うに、一般に欧和辞典の真価は、各見出し語についての訳語の的確さと、用法記述の精細さによって定まる。私たちももとよりこれに最大の努力を傾けたが、特に意を用いた点を列挙すると、およそ次のとおりである：

1. 語義の分類は煩瑣に過ぎぬ限度で綿密に行う(その配列は意味・用法の歴史的発達の順序によらず、原則として使用頻度に従った)。
2. 文法的説明を随所に挿入して、文法辞典的性格も帯びるようにする。
3. 一つの語義に対して、たやすく総合し難いような不明確な訳語の羅列を避け、なるべく意味の核心に近い少数の訳語に絞る。その代り、熟語・成句をはじめ句例・文例を豊富に挙げて、前後関係による意味の微妙な変化と、それに対応する訳語の違いを具体的に示す。
4. 句例・文例等に添えられる邦訳が、日本語として立派に通用しうるものかどうかをよく吟味する。
5. 各方面の術語や専門語の表現に能う限り適正で最新の訳語を当てる(但し、その事典的な説明は必要最小限にとどめた)。

とはいえ、これらのうちのいずれの一つを取っても、誠に言うは易く、行うは紙

幅の制約もあって至難の業に属することばかりだった。私たちは訳語・訳文の一字一句にも惜しみなく時間をかけ、稿を改めること数回に達した語が少なくない。その結果、この決して浩瀚とはいえない一辞書の作成に、予定を遥かに越える十九年足らずの歳月が費やされた。編集主幹としていささか忸怩たるものがないわけではない。しかも顧みてなお意に満たぬところが少なくないし、また思わぬ誤りも何かと見いだされることであろう。一体、言葉の真の意味では辞書に完成の日などはない。私たちは今、あまりに長きに及んだこの仕事に一応の終止符を打つというにとどまる。今後あらゆる機会を捉えて改訂を行い、すこしずつでも完成度を高めて独和辞典の発達に微力を捧げることを念願とする。切に各位の好意ある御指教、御叱正を願ってやまない。

上述のように本書は作成に予想外の長年月を要したので、執筆者の顔触れもその間かなりの異動を免れなかった。約一年の準備期間を経て、昭和43年4月執筆を開始した当時のメンバーは、川口洋、杉本正哉、富岡近雄、長尾伸、野田保之、長谷川洋、山田杉夫、山村直資(五十音順)の八氏と富山の九名であったが、爾後増員を重ね、二年のちの45年6月までに清水豊明、沼崎雅行、青木順三、野田倬、加藤宏、菊池武弘の六氏の参加を得た。しかし長尾、清水、山村、菊池、青木の五氏は、44年から50年までの間にそれぞれの事情で身を引かれた。その補充と増員が逐次行われ、五十嵐吉信、赤兎弘也、馬場義彦、石丸昭二、西山力也、伊藤一彦、吉田正彦の七氏が相次いで執筆陣に加わって、本書の編集に最終的な責任を負うべき下記十七名全員の顔が揃ったのは、昭和51年4月のことである。その時からでももう十一年に近い月日が経つ。思えば曲折の多い、長く険しい道であった。それだけにまた、今ようやくその道を辿り終り、全員つつがなく本書を世に送る日を迎える喜びは、言葉に尽せぬほど大きい。この思いは齢すでに七十路の半ばに達する筆者においてひとしお深いものがあるが、それにつけても多年労苦を共にして下さった同僚諸氏に対する熱い感謝の気持が、ふつつつとして胸底に湧きたぎるのを覚える。

しかしながら、本書がこうして刊行の運びになるまでには部外の方々にも一方ならぬお世話になった。とりわけ、前後十二年にわたって毎月編集室に足を運ばれ、私たちの執拗な質問にも親切丁寧にお答え下さったインゲボルク村田夫人、私たちに対する友情から進んで再校の校正刷の大半を御校閲下さった名古屋大学名誉教授伊東泰治氏と同助教授小栗友一氏、私たちの懇請を容れて発音解説を御担当下さった金沢大学教授田中宏幸氏、この四氏の御好意には感謝の念の尽きないものがある。また、多分に百科辞典の性格を帯びた本書の編集には、各方面の専門家を煩わさなければならない場合が甚だ多かった。動物学の今泉古典先生、植物学の福田泰二先生はじめ、数々の貴重な御教示、御助言を賜ったこれらの方々への有り難い御協力も、私たちは銘記して忘れないであろう。

最後になったが、ぜひ一言したいのは郁文堂社長大井敏夫氏が本書の刊行に注がれた並々ならぬ熱情である。牛歩の譬えにも増す遅々とした私たちの仕事ぶりに、大井氏は終始辛抱強い寛容な態度で臨まれた上、私たちのために執筆上のあらゆる便宜を計って、どんな犠牲も惜しまれなかった。真に出版人としての使命を自覚さ

れた氏の、このような理解と熱意に支えられてはじめて私たちの仕事は成就したと言っても過言でなからう。ここに深甚な敬意と謝意を表する次第である。

郁文堂編集部の諸氏に何かにつけて非常な御苦勞をお掛けしたことは改めて言うまでもない。わけても小黒朱実、板垣知子、平賀温子の三氏は、小黒氏の十年を筆頭に長期間、熱心に原稿整理と校正に当って下さったが、そのお仕事の正確で緻密なことにはしばしば頭の下がる思いがした。心からお礼を申し上げて、この序文の筆を擱くことにする。

昭和62年 新 春

富 山 芳 正

編 集 者

主 幹	富 山 芳 正	Yoshimasa Tomiyama
杉 本 正 哉	Masaya Sugimoto	お茶の水女子大学教授
富 岡 近 雄	Chikao Tomioka	武蔵大学教授
野 田 保 之	Yasuyuki Noda	東京農工大学教授
沼 崎 雅 行	Masayuki Numazaki	慶応義塾大学教授
山 田 杉 夫	Sugio Yamada	東京農工大学教授
長 谷 川 洋	Hiroshi Hasegawa	横浜市立大学教授
川 口 洋	Hiroshi Kawaguchi	学習院大学教授
野 田 倬	Akira Noda	東京工業大学教授
加 藤 宏	Hiroshi Kato	上智大学教授
赤 刎 弘 也	Hiroya Akabane	玉川大学教授
石 丸 昭 二	Shoji Ishimaru	お茶の水女子大学助教授
西 山 力 也	Rikiya Nishiyama	東京農工大学助教授
吉 田 正 彦	Masahiko Yoshida	明治大学助教授
馬 場 義 彦	Yoshihiko Baba	東京経済大学助教授
伊 藤 一 彦	Kazuhiko Ito	東京農工大学助教授
五 十 嵐 吉 信	Yoshinobu Igarashi	新潟大学教授

ドイツ人協力者

村田インゲボルク Ingeborg Murata

発音解説担当者

田 中 宏 幸 Hiroyuki Tanaka 金沢大学教授

使用上の注意

I. 見出し語

1 文字及び正書法 見出し語の文字はすべてボールド体(太字)を使用した。正書法は Der [Große] Duden: Bd. 1, Rechtschreibung (Mannheim / Wien / Zürich, 17. Aufl., 18. Aufl., 19. Aufl.) を基準にした。

2 配列 見出し語は、大番号 (I), (II)... を付けて追いつみにした語 (IV 2 d, 3 f 参照) を除いて、厳密にアルファベット順に配列し、ä, ö, ü は a, o, u のあとに、ß は ss のあとに置いてある。

原則として、同じつりの語は、語頭の文字が小文字のものを前、大文字のものをあとに、記号(‘, ! などの)付いたものを、付かないものあとに配列し、同じつりで語源等の理由により区別すべき語は、例えば **Abort¹**, **Abort²** のように右肩に番号を付け、別見出しにした。

同一語源の語は、アルファベット順の配列を乱さず、検索上の不便が生じないかぎり、改行せずに追いつ込んである。

3 複合語の表記 複合語の規定語と基礎語の間に連結符 **・** を挿入した場合、同じ規定語をもつ複合語を追いつむときには、規定語を繰り返す代りに、反復記号 **~** を用いて規定語を表してある。その際、規定語の語頭の文字が、大文字から小文字(又はその逆)に変わるときを表すには、印を付けた反復記号 **~** を使用した：

Abend·essen ... ~frie·de[n] ... ~füllend ...

なお、規定語又は基礎語それぞれが複合語で、その接合部を示す必要がある場合には、接合部を中黒・を用いて示した：

All·strom·gerät
Frau·en·fach·schule

4 つづりの分け方の表示 見出し語のつづりの分けられる箇所は符号(˘)を入れて表示した。ただし、複合語の連結符及び中黒、ハイフン、分離動詞の分離線(|)も、同様につづりを分けることが可能な箇所を示している。

なお、つづりを分けるとき、つづりの変える場合には、見出し語の直後に置いたくゝの中にそれを示した：

Deckel<..k.k.>
allie·bend<..lll.>

つづりの分け方の詳細については巻末の付録 I を参照されたい。

II. 発音の表示

1 主見出し語の発音は、音標文字による表示を原則とした。追いつみにした語及び複合語では、支障のないかぎり見出し語に簡易表音符を添えて発音を示した。

2 音標文字による表示 音標文字は [] に入れて、

見出し語の直後に置いた。一つの語に二通り以上の発音があり、その発音の違いがアクセントの位置又は母音の長短にかぎられる場合には、長母音及び複母音(二重母音)は - で、短母音は ˘ で表示した：

not·wen·dig ['no:t·vɛndɪç, -'˘-]
Kaffee ['kafɛ, -'˘-]

追いつみにした語の音標文字で、先行の語の音標文字と共通の部分があるときには、それを省略符 **..** を用いて示した：

Au·di·on ['au·di·ɔn] ... **Au·di·teur** [˘'tø:r]

上の例では、先行の語のアクセントは移動して、**..** の部分にはないことに注意されたい。

変化する発音も、見出し語と異なるものや注意すべきものは、音標文字で示してある。

なお音標文字についての詳細は「発音解説」を参照されたい。

3 簡易表音符による表示 音標文字による発音表示のない語には、見出し語のアクセントのある音節の左肩には符号(˘)を、長母音及び複母音(二重母音)の下には符号(-)を、それぞれ付けて発音を示した：

'Fahr·plan
'Haar·band
'ein·schleu·sen

ie は [i:] と発音される場合には **ie** と表示し、外来語でアクセントのある音節のあとの同一音節中において [ia] と発音される場合には **ie** と表示されている：

Ana·lo·'gie
'Bank·aktie

但し、変化語尾では二音節に分れる場合にも **ie** が用いてある：**Ora·˘'to·ri·um n. -s, ..rien,**

なお、つづりと発音が主見出し語と同じ語が一個追いつまれている、その発音が簡易表音符では表示できない場合には、例外として発音表示を全く省略した。

4 複合語の発音については、規定語・基礎語とも簡易表音符で表示することを原則としている。しかし、その規定語又は基礎語が見出し語として出ていないか、その発音が簡易表音符では示せない場合には、音標文字と簡易表音符を併用して発音を示した：

Lit·faß·säu·le ['lit·fas..]
Bor·deaux·wein [bɔr˘'do˘:]
'Damen·fri·seur [˘'frizø:r]

また、複合語が連続して追いつまれる場合のアクセントは次のように表示されている。

アクセントが規定語にある場合：

'acht·stün·dig ... ~tā·gig ...

アクセントが規定語と基礎語の2ヵ所にある場合：

'acht·stün·dig ... ~˘'tau·send ...

アクセントが規定語から基礎語に移る場合:

Reichs_ abschied ... ~au^oto^obahn
[raɪçs'au^otoba:n] ...

III. 語 源

1 原則として、音標文字又は見出し語の直後に [] を用いて当該の語の語源の説明を施した。

2 説明に用いた言語名は表見返しの別表に掲げた略語によつたが、必要に応じてそれ以外の表記もとつた。例えば、mittellat. は mittellateinisch (中世ラテン語) の義である。

3 ドイツ固有の語については、しばしばそれと語源的に対応する英語(意味は必ずしも一致しない)を挙げてある:

Licht [engl. *light* に対応]

klein [ahd. „glänzend, sauber“; engl. *clean* に対応]

4 語源欄に用いた記号には以下のものがある。

- 外来語がドイツ語に入った経路を示すのに用いる:

例えば **Alkoven** における [arab.-sp.-fr.] はアラビア語からスペイン語・フランス語を経てドイツ語に入ったことを表す。

< 語の派生や由来を示すのに用いる:

hüten [<Hut^o]

Kauf [<kaufen]

ちなみに、**ausgefeimt** における [<ausfeimen^o „(の)泡を除く“ の過去分詞] は、今日では古語となった動詞の過去分詞が形容詞として固定したことを示す。

なお、直訳語や部分的意識語のような、いわゆる「内の借用語」にもこの記号を用いた:

Halb_insel [Lüt.<lat. *paeninsula*]

+ 複合語や派生語の構成要素を結ぶのに用いる:

Auto_mobil [gr.+lat. „Selbstbeweger“]

bange [<be+ange (enge の古い副詞形)]

IV. 品詞の表記について

1. 名 詞

(a) 原則として、名詞にはすべて性(男性: *m.*, 女性: *f.*, 中性: *n.*) 及び単数 2 格と複数 1 格の変化形が示してある。

変化形を挙げる際、見出し語の全体を表示する符号には - を、その一部を表すのには .. を用いた:

Ertrag *m.* -[e]s, ..träge,

Bank¹ *f.* -, Bänke,

Vorbild *n.* -[e]s, -er,

Meter *m.* *u.* *n.* -s, -,

Abdomen *n.* -s, - *u.* ..mina,

Batik *m.* -s, -en / *f.* -, -en,

Extrakt *m.* (*n.*) -[e]s, -e,

La_bor *n.* -s, -s (-e),

上例で、*m.* *u.* *n.* は男性と中性の 2 種の性が、- *u.* ..mina は 2 種の複数形が、*m.* -s, -en / *f.* -, -en は 2 種の性と変化形が、それぞれ用いられることを示す。

また、*m.* (*n.*) や -s (-e) は、括弧内に指示してある性や変化形がより稀なことを表す。

なお、変化形が一つしか挙げていないものは複数形がないことを、性の表示がなく *pl.* の符号の付いたものは、見出し語が複数形であることを示している:

Beschuß *m.* ..schusses,

Ferien *pl.*

複合名詞は変化形を基礎語で検索できるので、原則として、性だけが挙げてある(基礎語自体が複合名詞の場合は、接合部を中黒で示してあるから、中黒のあとの基礎語で検索されたい)。但し、複合名詞で複数形がない場合には単数 2 格の変化形を示し、複数の形に限定のある場合には、それを « » に入れて示してある:

Gras_land *n.* -[e]s,

Fach_mann *m.* «*pl.* ..leute *u.* (まれに:)..män-ner»

(b) 形容詞・分詞が名詞化したものは、形容詞に準じた変化をするので、そのことを見出し語の右肩に * の符号を付けて示し、見出し語及び変化形は弱変化(定冠詞が付いたときの変化)の形を挙げた:

Abge_sandte[#] *m.* *u.* *f.* -n, -n,

(c) 地名で『固』とのみ表示したものは中性・無冠詞であることを示す。その他の地名には性と変化形を付けた:

Deutsch_land [『固』ドイツ[国].]

Sudan *m.* -[s], [『固』スーダン.]

Donau *f.* -, [『固』ドナウ川.]

El_saß *n.* - *u.* ..sasses, [『固』エルザス, アルザス.]

2. 形容詞・副詞

(a) 比較級・最高級で幹母音の変るものと及び不規則な変化をするものは、原則としてその形を発音の表示の次に括弧に入れて示した:

alt [alt] (älter, ältest)

bange [ˈbaŋə] (banger, bangst / bänger, bängst)

(b) ドイツ語では、形容詞はふつう副詞としても用いられるので、副詞としての使用頻度が高いものや訳語が著しく変わるもの以外は、*adv.* の記号を付けて分類することを省略してある。

(c) 形容詞の用法に限定があるときは、訳語の前に「付加語的にのみ」、「述語的にのみ」、「述語的に用いられない」の用法指示が付けてある。

また、語尾変化をしないものには、「不変化」の指示を付けた。

(d) 名詞化した形容詞は原則として、大番号を付けて、その形容詞の項に追いつき込みにしてある:

krank (I) *adj.* ... (II) **Kran_ke**[#] *m.* *u.* *f.* ...

3. 動 詞

- (a) 強変化・混合変化・不規則動詞の見出し語には右肩にアステリスク * を、強変化又は混合変化と弱変化の2種の変化をもつ動詞では (*) を付け、それらが単一動詞であれば、発音表示の次に括弧に入れて過去及び過去分詞の形を示した:

binden* ['bɪndən] (band, gebunden)

senden(*) ['zɛndən] (sandte, gesandt / sendete, gesendet)

backen¹(*) <..k'k..> ['bakən] (backte u. buk, gebacken)

- (b) 分離動詞の見出し語には、分離の前つづりのあとに分離線(縦の実線 |)を入れた:

ab|führen

her|aus|kom|men*

- (c) 一つの動詞の用法が自動詞・他動詞・再帰動詞のうちの2種以上にわたる場合には、原則として大番号を付けて分類してある:

ab|set|zen (I) *t.* ... (II) *i.(h)* ... (III) *refl.* ...

- (d) 完了時称で自動詞が助動詞の *sein* をとるか *haben* をとるか (s), (h) で示した。(h,s), (s,h) の指示のあるものは、どちらもとれるが、先に記してある方が使用頻度が高いことを示している。

また、語義によって助動詞のとり方の違う場合には、訳語の分類番号のあとに指示した:

ein|bre|chen* (I) *i.* 1 (s,h) ... 2 (s) ...

- (e) 名詞化した不定詞の重要なものは、大番号を付けて、その動詞の項に追い込みにしてある:

leiden* (I) *i.(h)* ... (II) *t.* ... (III) **Leiden**¹ *n.* ...

- (f) 形容詞的に用いられる過去分詞(現在分詞)の重要なもの、大番号を付けて、その動詞の項に追い込んである。

nen|nen (I) *t.* ... (II) *refl.* ... (III) **ge|nannt** *p.a.* ...

但し、形容詞化が著しく、独立の見出し語としたものには、その箇所を参照するように指示をした:

ma|chen (I) *t.* ... (II) *refl.* ... (III) *i.* ... (IV) → **ge|macht** *p.a.*

V. 訳語と用例について

- 1 訳語は、語義・用法の違いに応じて、可能な限り分類し、その記載の順序は、原則として、現在使用される度数の高いものから低い方へ、具体的な意味から比喩的な意味に向うように配列してある。

- 2 訳語の分類番号には 1, 2, 3 ... を、その番号内での語義・用法の細かな違いを示すには、(a), (b), (c) ... 又はセミコロン (;) を用いた。同義・類義の訳語を挙げる場合には、コンマ (,) で区切って示した。

用例はセミコロンで区切って挙げ、一つの例に2種以

上の意味の異なる訳を挙げるときには、a), b), c) ... を付けて分類した。

なお、同一の訳語が2種以上の意味をもつときには、④, ⑥, ⑦ ... を用いて、括弧内で説明を加え分類した:

Norm ... 2 ノルマ (④ 基準労働量のこと, ⑥ 東独では製品を生産するために必要な労働・材料などの規定消費量)。

- 3 用例中に用いられた反復記号 ~ は、見出し語(但し、連結符 ~ を付した複合語では規定語の反復を、~ は見出し語の語頭の文字を大文字から小文字(又はその逆)にして反復することを示す。

句例で、人・物(等)を一般的に表示するには、代名詞の略語 *jn., jm., js., et., et.** や *eines Dinges* を用いた:

an|sprit|zen (I) *t.* et. (jn.) mit et.* ~ 或物(人)に或物(水など)をかける。

再帰代名詞は4格には *sich*, 3格には *sich** を用い、主語又は目的語に対応して「自分の」を表す所有代名詞を一般的に表示するには *sein* を用いた。

- 4 多くのケースに当てはまる中心的訳語の挙示が不可能なときは、直ちに用例を列挙して、訳し方を具体的に示してあるが、それらに共通の語義の説明が可能な場合には、訳語に代るものとして、それを冒頭に括弧に入れて示した:

lauten (I) *i.(h)* 1 (a) (の文言は…である:) der Befehl (die Wahlparole) lautet so 命令はこうだ (選挙スローガンはこう語っている); der Brief lautete wie folgt 手紙は次のように書かれていた。

- 5 ドイツ語の同義語・対義語がある場合には、必要に応じて括弧 () に入れて訳語の前に挙げてある。

- 6 訳語・用例およびその訳の中で、交換可能な部分(語・語句)を示すには括弧 () を用いている:

fremd|artig *adj.* 外国(異国)風の。

Ab|bau ... der ~ eines Betriebes (der Rüstungen) 企業(軍備)の縮小。

但し、用例中の同義で交換可能な部分を示すときは、*od.* を付けて括弧 () に入れ、同義で交換可能な用例の区分には斜線 (/) を使用した:

ge|boren ... er ist der ~e (*od.* ein ~er) Schauspieler 彼は天成の役者だ。

all ... bei allem dem / bei dem allen (*od.* allem) それにもかかわらず。

- 7 訳語や用例の訳を限定又は補足する説明(動詞の目的語などの指示を含む)も、括弧 () に入れて示した:

Ab|druck ... 印刷(に付すること); (新聞・雑誌への)掲載。

fort|schrei|ben* *t.* ... (人口などの統計を)補正する(新たな資料で)。

Libe|rtas 〔同〕(ローマ神話:) リベルタス(自由の女神)。

Bon|net ... 縁なし帽(キャップ、フード etc.)。

なお、最後の例では、訳語は括弧内に挙げてあるものを

総括する上位の概念であることを示している。

- 8 文法上の指示は《 》に入れ、訳語や用例の前に掲げられる。なお、文法上のくわしい説明は『』の記号のあとに付けた：

Kapa-zität *f.* -, -en, 1 《単数でのみ》 ... 2

(a) 《複数は稀》 ... (b) 《通常複数で》 ...

mangeln² *i.* (h) 1 《非人称的にも》《必要とする物が無い、欠けている； ... 2 『古』《人が主語》 ...

VI. 専門用語の表示について

- 1 この辞典では、学問・技術上の専門用語の表示には略語を用いず、『哲学』、『文芸学』、『生化学』、『ギリシア神

話』、『スポーツ』などのように『 』内に略さずに書いて示す方式がとられている。

- 2 『動物』、『植物』の表示は動物学・植物学上の動・植物名及びその専門用語を示す場合に用いてある。

なお、動・植物の一般に用いられている名称が、植物学上の名称と異なる場合には、その区別がわかるように表示した：

Distel *f.* -, -n, 薊(あざみ)；きく科または他の科のあざみに似た多くは棘(とげ)のある植物の総称；『植物』やはずあざみ属。

Echse *f.* -, -n, 蜥蜴(とつ)；『動物』(*pl.*) とかけ重日。

ちなみに、上例の(*pl.*)は、動物学で「とかけ重日」を表すときは通常複数であることを示している。

主要専門語表示一覧

『医学』	『教育学』	『射撃』	『政治』	『電算機』	『紡績』
『イスラム教』	『漁業』	『写真』	『聖書』	『電信』	『放送』
『印刷』	『ギリシア神話』	『獣医』	『生徒語』	『伝説』	『法律』
『映画』	『キリスト教』	『宗教学』	『生物』	『天文』	『北欧神話』
『園芸』	『金融』	『修辞』	『製本』	『統計』	『ボクシング』
『演劇』	『経済』	『手芸』	『生理』	『動物』	『保険』
『音楽』	『競馬』	『狩猟』	『繊維』	『登山』	『民俗』
『音楽記号』	『ゲルマン伝説』	『商業』	『染色』	『土木』	『紋章学』
『会計』	『言語学』	『醸造』	『占星』	『トランプ』	『冶金』
『海語』	『原子物理』	『植物』	『造船』	『農業』	『薬学』
『解剖』	『建築』	『新教』	『漕艇』	『馬術』	『郵便』
『化学』	『工学』	『心理』	『測量』	『パレエ』	『ユダヤ教』
『化学記号』	『光学』	『人類学』	『体操』	『美学』	『窯業』
『学制』	『工業』	『神話』	『玉突き』	『美術』	『幼児語』
『学生語』	『航空』	『水産』	『チェス』	『美容』	『養蜂』
『カトリック』	『考古学』	『数学』	『地学』	『フェンシング』	『陸上競技』
『官庁』	『鉱山』	『数学記号』	『畜産』	『服飾』	『理容』
『機械』	『鉱物』	『スキー』	『地理』	『物理』	『料理』
『議会』	『裁縫』	『スポーツ』	『通信』	『物理記号』	『林業』
『記号』	『サッカー』	『製靴』	『哲学』	『舞踊』	『歴史』
『気象』	『史学』	『生化学』	『鉄道』	『文芸学』	『レスリング』
『気象記号』	『詩学』	『製革』	『テニス』	『文法』	『ローマ神話』
『球技』	『社会学』	『製紙』	『電気』	『兵語』	『論理』

発音解説

I 音標文字とその調音法

(1) 母音

母音は口の開きの広狭(舌の低高)、舌のどの部分が口蓋のどの部分に接近するか(調音位置の前後)、及び唇のまるめを伴うか否か(円唇・非円唇)で区別される。14 単母音と 3 二重母音、それに外来語で用いられる若干の母音がある。なお、標準日本語では 5 母音しか用いられない。大体の相違については図 2 を参照されたい。

(a) 前舌非円唇母音

[i] 唇は横に平たく引き、前舌を硬口蓋にできるだけ接近させて発音する。口の開きの最も狭い母音。はっきり発音した日本語のイ音に近い。アクセントがある音節では常に長い: [i:]。

[ɪ] [i] より唇はやや広く、舌も低く、いくぶん後ろ寄りに調音される。舌の張りも [i] より弱い。常に短い。

[e] [i] より唇はやや広く、舌も低くなるが、エ音よりは高い。アクセントのある音節では常に長い: [e:]。

[ɛ] [e] より唇を開け、舌も低くなる。エ音よりやや広い。この長音 [ɛ:] はやや狭く発音される傾向がある。

(b) 前舌円唇母音

[y] 唇を [u] の場合とほぼ同様にまるめて前へ突き出し、舌の位置は大体 [i] と同じであるが、やや後ろ寄りに調音される。アクセントがある音節では常に長い: [y:]。

[ɥ] 唇のまるめは [y] より軽く、[u] の場合に近い。舌の位置は [i] とほぼ同じ。[y] より舌の張りも弱い。常に短い。

[ø] 唇は [o] の場合とほぼ同じようにまるめ、舌の位置は [e] よりやや低く、やや後ろ寄りに調音される。アクセントがある音節では常に長い: [ø:]。

[œ] [o] よりやや広く、唇のまるめは [ɔ] と、舌の位置は [ɛ] と大体同じであるが、やや後ろ寄りに調音される。常に短い。

(c) 後舌円唇母音

[u] 唇をまるめて突き出し、後舌をできるだけ軟口蓋に接近させて発音する。最も狭い後舌母音。ウ音では唇のまるめを伴わないことが多く、また舌の位置もやや前寄りで低い。アクセントのある音節では常に長い: [u:]。

[ʊ] [u] より唇のまるめはゆるく、舌の位置も低くやや前寄りに調音される。舌の張りも弱い。ウ音よりやや広い。常に短い。

[o] 唇は [u] よりやや広く、舌も低い。しかしオ音よりやや高め。アクセントのある音節では常に長い: [o:]。

[ɔ] 唇は [o] よりさらに開き、舌も低く調音される。オ音より広い母音。常に短い。

(d) 非円唇広母音

[a] 口の開きの最も大きな母音。舌はほとんど平らである。ア音に近い。

(e) 中舌弱母音

[ə] 唇はゆるく少し開け、中舌を軽く上げて調音されるあいまいな弱母音。通常弱いエ音として聞えるが、常に短く、アクセントを伴わない。実際の発音では消失しやすい母音である。

(f) 二重母音

[aɪ] [a] から [ɪ] に向って弱まりながら舌の位置を移動させる。下降二重母音。後半は [ɪ] まで達しないで [e] の辺りで終ることも多い。

[aʊ] [a] から [ʊ] に向って弱まりながら舌の位置を移動させるが、同時に円唇も加わる。下降二重母音。後半は [ʊ] まで達しないで [o] の辺りで終ることも多い。

[ɔɪ] [ɔ] から [ɪ] に向って弱まりながら舌の位置を移動させて発音。円唇を伴う。下降二重母音。後半は [ɪ] まで達しないで [o] の辺りで終ることも多い。

(g) 外来語に用いられる母音

1) 鼻母音 [ɛ̃], [œ̃], [õ], [ã] はフランス語系外来語で用いられる。それぞれ [ɛ], [œ], [o], [a] とは同じ唇の形、舌の位置で呼気の一部を鼻腔の方へも通して発音する。アクセントがあれば大体長い。

2) その他の母音

[æ] [ɛ] より広い前舌非円唇母音で、主に英語系外来語で用いる。

[ʌ] 半広の後舌非円唇母音。[ɔ] より少し前寄りで唇をまるめないで発音する。

[ɑ] [a] より後方で発音される。後舌広母音(非円唇)。

[ɶ] [ə] より広くア音に近い音色の弱い母音。中舌半広母音。

[ɐ] [i] の鼻母音

[i, u] [i, u] が音節副音となったもの。他の母音と一つの音節を形成する。

(2) 子音

子音は調音位置、調音法、有声・無声により区別される。6 閉鎖音、9 摩擦音、3 鼻音、1 側面音、2 震音、3 破裂音がある。これ以外に語頭母音などの前に声門閉鎖音が用いられ、また外来語で若干の外来語子音が現れる。標準日本語の子音と比較して、特に摩擦音と側面音、震音で差異が大きい。図 3 を参照されたい。

(a) 閉鎖音 呼気の通路を一時的に閉鎖し、急な破裂で開放して調音する瞬間的な噪音子音。無声音と有声音がある。無声音では気音を伴うことが多く、又その調音の緊張度は有声音に比較して高く硬音ともよばれる。有声音はこれに対して緊張度は低く軟音ともよばれる。なお、日本語より有声の度合は弱い。

[p] 両唇を合せて閉鎖・破裂させて発音する無声音。バ行の子音とは同じ。

[b] [p]の有声音。バ行子音とほぼ同じ。

[t] 上歯から歯茎の辺りに舌先を接して調音される無声音。タ行子音に近い。

[d] [t]の有声音。ダ行子音に近い。

[k] 後舌を軟口蓋に接して調音される無声音。カ行子音とほぼ同じ。

[g] [k]の有声音。濁音のガ行子音とほぼ同じ子音。

(b) 摩擦音 原則的に呼吸の通路に狭めを形成して調音される継続的な摩擦音。無声音と有声音がある。閉鎖音の場合と同様、前者の緊張度の方が高い。

[f] 上歯を下唇に接して発音される無声音。

[v] [f]の有声音。

[s] 前舌を上歯の後ろから歯茎辺りに接近させて調音する無声音。サの子音に近い。

[z] [s]の有声音。

[ʃ] 舌先を歯茎に [s] の場合より後寄りに接近させて調音する無声音。又唇のまるめを伴う。シ、シャなどの子音は似ているが唇のまるめを伴わない。

[ç] 前舌から中舌にかけて舌面を硬口蓋に向けて [i] より狭く接近させて調音する無声音。前舌母音、子音の後ももっぱら現れる。ヒ、ヒヤなどの子音と同じ。

[j] [ç]の有声音。ヤの子音より通路は狭い。

[x] 後舌を軟口蓋に向って接近させて調音する無声音。[a] 及び後舌母音の後ももっぱら現れる。

[h] 無声声門摩擦音で、ハ、ヘ、ホの子音とほぼ同じ。

(c) 鼻音 口腔内の呼吸の通路を閉鎖し、呼吸を鼻腔の方へ通しながらか発音される。有声音のみ。

[m] 両唇をゆるく閉じ、呼吸を鼻腔へ通しながら発音。マ行子音と同じ。

[n] 舌先と上歯から歯茎の辺りで閉鎖を形成し、呼吸を鼻腔へ通しながら発音する。ナ行子音と同じ。

[ŋ] 後舌と軟口蓋で調音される鼻子音。鼻濁音のガ行子音と同じ音。

(d) 側面音 口腔中央部でのみ閉鎖が形成され、舌の側面から呼吸が送られる子音。継続音。有声音。

[l] 舌先を上歯から歯茎の後に付け、舌の側面から呼吸を通して発音する。

(e) 震音 呼吸により調音器官が数回震えることにより発音される子音。舌先を震わす歯茎音 [r] と口蓋垂(のどびこ)を震わす [ʀ] がある。ともに有声音。この2音はドイツ語ではどちらを用いてもいいので、通常 [r] を用いて表す。現今では口蓋垂音の方が優勢となっている。(但し声楽では歯茎音が好まれる)。

[r] 歯茎音は舌先を歯茎にあて、呼吸を送り二三次舌先を震わせて調音する。いわゆる巻き舌のラ行子音である。舌先を一度だけはじょうに調音する音を用いてもいい。これは母音間のラ行子音に近い。

口蓋垂音は後舌後部を口蓋垂に向って接近させ、呼吸により二三次口蓋垂を震わす。

(f) 破擦音 閉鎖音の次に、その破裂とほとんど同時に、ほぼ同じ調音位置の摩擦音が続く子音。本来のドイツ語音としては無声音のみ。なお、破擦音とならない音の連続は、

本書では [p-f], [t-f] のように表す。

[pf] 閉じた両唇を破裂させると同時に上歯が下唇に接して [f] を発音する。しばしば両唇を閉じたとき、既にも上歯は下唇に触れている。

[ts] [t] を破裂させると同時に [s] が続く。ツの子音と同じ。

[tʃ] [t] の後に [ʃ] が続く。チ、チュなどの子音に近い。

(g) 外来語に用いられる子音

[θ] 舌先を上歯の後に接近させて狭めを形成して調音。無声摩擦音。

[ð] [θ] の有声音。

[ʒ] [ʃ] の有声音。

[p̥] 前舌と硬口蓋の閉鎖により調音される有声音。ピヤ、ピュなどの子音に近い。

[dʒ] [tʃ] の有声音。

[w] 唇をまるめ、後舌を [u] とほぼ同じく軟口蓋へ接近させて調音する無摩擦継続音。ワの子音は似ているが通常両唇を伴わない。

[ɰ] 唇をまるめ、[j] とほぼ同じ位置で調音される。ただし狭めはややゆるい。無摩擦継続音。

II 発音上の諸問題

(1) 声門閉鎖音

ドイツ語では母音で始まる語は声門閉鎖音による明瞭な声立てて発音される。従って前の子音との連音は起らない。この音は声門を一時的に閉じて呼吸を止め、急に開放する無声の閉鎖音。音声記号は [ʔ] であるが、語頭の母音についてはこの記号は省略される。本書では、これを示す必要がある場合は次のように表す: aneinander [an̥aɪ'nandər]。

(2) 長母音と短母音

長母音は短母音より長いばかりでなく、やや狭く、かつ緊張度も高く調音される。閉音という。これに対し短母音は開音とよばれる。ただし [a:], [a] ではこの差異はなく、[e] のみは長母音 [e:] も存在する。

長母音(閉音): [i:, e:, y:, ø:, u:, o:]

短母音(開音): [ɪ, ɛ, ʏ, œ, ʊ, ɔ]

アクセントの無い音節では閉音の短母音も用いられる。

短母音(閉音): [i, e, y, ø, u, o] (Biologie [biolo-'gi:], lebendig [le'bɛndɪç])

(3) 無声閉鎖音の気音

[p, t, k] はアクセントのある母音の前(語頭)または後(語末)で気音を伴って発音される: Pein [p̥aɪn], Ecke [ˈɛk̥ə]. 気音の音声記号は通常省略される。

(4) 語尾と発音

1) 通常の変化語尾や派生語尾は単純に付加して発音すればいい: reiche ['raɪçə], reichst [raɪçst].

2) 語幹が b, d, g, v, s の文字で終る語では、無語尾か子音が続く場合は無声音で、母音が続く場合は有声音で発音される: lieben ['li:bən], liebst [li:pst], liebt [li:pt]; Bad [ba:t], Bades ['ba:dəs]; Tag [ta:k], Tages ['ta:gəs], Tags [ta:ks]; aktiv [ak'tɪf], aktive [ak'ti:və]; Gras [gras], Grases ['graz:əs].

3) その他の注意すべき発音

a) -ig では [ç] と [g] が交替する: ewig ['e:viç], ewige ['e:viɡə].

b) Buch [bu:x], Bücher ['by:çər]; brechen ['brɛçən], brach [bra:x] などでは [x], [ç] が交替する.

c) [t] に [s] が続くとき破擦音 [ts] となる: Rats [ra:ts].

d) [t] に終る語に -sch [ʃ] が付くと破擦音 [tʃ] となる: Brechtsch [brɛçtʃ]. しかし派生語尾 -schaft などが続くとき破擦音とならない: Landschaft ['lant-ʃaft].

(5) 合成語などでの発音の注意

1) 原則として各成分はアクセントを除けば、独立の語と同じ発音となる。成分間では連音や破擦音化などは起らない: Eigenart ['aɪɡən:art], Abfall ['ap-fal].

2) 接続の語尾 s は [s] と発音, [t] の後は破擦音となる: Arbeitsmarkt ['arbaitʃmarkt].

3) 同じ種類の子音が連続するときは、発音しなおさないで一つの子音を長めに発音する。語間でもこのように発音される: Schiffahrt ['ʃiffa:rt] ([f] が長く発音される), Sackgasse ['zakɡasə] ([k] を破裂させないで、そのまま [ɡ] に移る).

(6) 実際の発音

本書で採用した発音表記は、正確明瞭な発音を意識する場合の最も厳格な標準を示すもので、実際の標準発音では、かなり緩和された発音が行われている。さらに、日常会話などでは、さまざまな状況に応じて、発音は簡略化し、音の消失や同化が一般化している。

(a) 緩和された実際の標準発音の標準

1) 語末の [əl, əm, ən] の [ə] が消失し音節化した [l, m, n] が発音される: Himmel ['hɪmə] → ['hɪml], großem ['gro:səm] → ['gro:sm], leben ['le:bən] → ['le:bm]. [n] はさらに前の子音に同化されて [m, ŋ] になる傾向がある: leben ['le:bən] → ['le:bm].

2) 口蓋垂震音 [R] の代りに口蓋垂に後舌を接近させるだけで口蓋垂を震わせないで調音される有声摩擦音 [ʁ] も用いられる: Rat [ra:t] → [ʁa:t]. また [a:] 以外の長母音の後や er-, her-, ver- などの前つづりの r 及び語末の [-ər] は母音化し [ə] と発音される: Uhr [u:r] → [u:ə], Erde ['e:rdə] → ['e:ədə], Erfolg [er'fɔlk] → [eə'fɔlk], unser ['unzər] → ['unzə], wandern ['vandərən] → ['vanden]. ただし母音語尾が付くと母音化しない: unsere ['unzərə].

3) [b, d, g, v, z, j] は無声子音の後で無声化する.

4) 外来語などの母音前のアクセントの無い [i, y, u, o] は音節副音化する: Nation [natsi'o:n] → [na-'tsjo:n].

5) 鼻母音は母音+[ŋ] に代えられる: Chance ['ʃa:sə] → ['ʃaŋsə].

(b) 日常の口語発音ではさらに、長母音の短母音化: Bad [ba:t] → [bat]; [ə] の一般的な消失, r 音の一般的な母音化, 声門閉鎖音や気音の消失, 子音の弱化や消失: [pf] → [f], [ts] → [s], mitteilen ['mittailən] →

['mittailən]; 各種の同化: anbinden [nb] → [mb], Signal [gn] → [ŋn]; 無声化や有声化: möglich [kl] → [gl] などの傾向がみられる。特に形式語では発音が弱化するのて聞きとりにくい: haben [ham], und [ən, n] など.

(c) 逆に書取りや騒音の中などでは強調した発音となる。[ə] を [e:, ɛ] で代えたり、強い気音を発音したりする。gehen を ['ge:hən] と発音するなどこの例である。

(d) 地方的な発音 日常レベルの発音では、さらに地方的な発音も入ってくる。北ドイツでは長母音の短母音化, [e:] → [e], 語頭の sp, st [ʃp, ʃt] → [sp, st], pf [pf] → [f], 語末の ng [ŋ] → [ŋk] (lang [laŋk]); 南ドイツ, スイス, オーストリアでは Jagd, Erde などの短母音化, 語末の -ig [ç] → [k], 語頭の ch [ç] → [k] (Chemie [ke'mi:]), 語頭以外の sp, st [sp, st] → [ʃp, ʃt] (bist [bɪʃt]) などの発音が聞かれる。また各地で g でつづられる音は gut [jʊt], Sorge ['zɔrjə], liegen ['li:jən, 'li:çən], Wagen ['va:xən], liegt [li:çt], Tag [ta:x, tax] などと発音される。また ch [ç] を [ʃ] (ich [ɪʃ]) と発音する地方もある。さらに中部・南ドイツには [b, d, g, z] を無声化したり, [p, t, k, s] と区別しない所がある。

III アクセントとイントネーション

(1) アクセント

通常 1 単語内の 1 音節にアクセントがあり、他の音節は弱い。なお合成語などでは副次的なアクセントが認められる。合成語以外では、アクセントの位置の相違による意味の区別はないのが普通である(例外については(7)を参照)。また、変化語尾やドイツ語本来の後つづりが続いてもアクセントは移動しない。以下アクセントの位置の原則を示す。

1) 単一語では第 1 音節にアクセントがある: 'Arbeit, 'Heirat.

2) 派生語では基幹語にアクセントがある: 'langsam. be-, emp-, ent-, er-, ge-, ver-, zer- などの前つづりにもアクセントはない。ただし -ei, -ieren, -al, -ion, -ist など外来語系の後つづりにはアクセントがある: Kar'tei, Nati'on.

3) 外来語などでは第 1 音節以外にアクセントをもつものが多い: Bü'ro, Ka'mel, Mu'sik.

4) 合成語では通常前の成分にアクセントがある: 'Fahrplan, 'grasgrün. いわゆる分離の前つづりにはアクセントがある: 'nachfolgen. 一部の合成語では後の成分にアクセントがある: Lebe'wohl, Jahr'hundert.

5) 並列合成では各成分が強められる。最後の成分にアクセントがあることもある: 'Schleswig-'Holstein, 'schwarz-'weiß.

6) 強調の合成では一般に両成分にアクセントをおくが、後の成分にアクセントをおく場合もある: 'haar-'scharf, 'blut'jung, 'tag'täglich.

7) 分離・非分離の前つづりや da-, her-, hin-, un-, zu- などではアクセントがある場合とない場合があり、しばしば意味を区別する: darauf [da'rauf, '-], ほかの語で

も2種のアクセントを示す場合があり、またアクセントの差異により意味を区別する語もある: *Abteil* ['aptail, -'ɪ-], *August* ['august] (人名) [au'gust] (月名).

8) 3成分の合成・派生語で第2成分にアクセントがおかれる場合がある: *augen'blicklich*, *Ober'bürgermeister*.

9) アルファベット名で発音される短縮語では通常最後の成分にアクセントがおかれる: *CDU* [tse:de:'u:].

(2) イントネーション(文音調)

文中では意味の重要な数語にアクセントがおかれ、さらに最も重要な語のアクセント音節が最も強調される。これら強調のリズム単位の連続に音調が加わる。特に重要なのは文末の音調で、基本的に3音調が用いられる。

(a) 終結調 主要アクセント音節の後の音節の音高が低くなる。

Wir gehen nach Hause.

主要アクセント音節で終る場合は、この音節自体の後半で音高が下降する。

Jeder Tag war ein Fest.

叙述文、命令文、感嘆文、補足疑問文で用いる。

Wann gehen wir nach Hause?

決定疑問文で用いると厳格な調子を帯びる。

(b) 継続調 主要アクセント音節の後の音節の音高は中高のままか、少し上下するとどまる。

Wir gehen nach Hause, wenn ...

発語が継続している場合に用いる。短い叙述文を大きい単位にまとめた場合も用いる。逆に強い印象を与えるために継続調の代りに終結調を用いることもある。

(c) 疑問調 主アクセント音節の後の音節の音高が上昇する。

Gehen wir nach Hause?

特に最後の音節が一段と高くなることが多い。

Hat jemand angerufen?

主アクセント音節で終る場合は、この音節自体の後半が上昇する。決定疑問文に用いる。命令文や補足疑問文に用いると親近感を帯びる。

IV つづり字と発音

母音の長短の原則

1) 1母音字はアクセントのある開音節(母音に終る音節)では長く、閉音節(子音に終る音節)では短い: *sagen* ['za:gən], *Masse* ['masə]. ただし1子音字で終る閉音節では(特に語末で)長母音の場合も多い: *Tag* [ta:k], *groß* [gro:s].

また変化語尾が付された場合も語幹の長母音は保たれる: *Tags* [ta:ks], *sagst* [za:kst].

アクセントがない場合はたいいてい短い: *darauf* [da-'rauf].

2) 母音字重複は長母音を示す: *Seele* ['ze:lə].

3) 母音字に続く *h* はサイレントで前の単母音字は長母音になる: *Bahn* [ba:n].

* 印は固有名詞、外来語で用いられる。

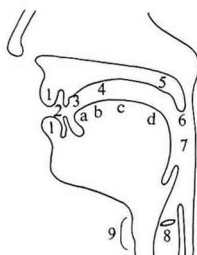
a	[a]	Mann [man]
	[a:]	Name ['na:mə]
	[a:]*	Hardware ['ha:dwɛə]
	[ɛ]	Camping ['kɛmpɪŋ]
	[e:]*	Cape [ke:p]
	[æ:]*	Caddie ['kædi]
	[ɐ:]*	Nikita ['ni'kite]
ä	[ɛ]	Gäste ['gɛstə]
	[ɛ:]	Bär [bɛ:r]
aa	[a:]	Saal [za:l]
ah	[a:]	Bahn [ban]
äh	[ɛ:]	Fähre ['fɛ:rə]
ai	[aɪ]	Mai [mai]
	[ɛ:]*, [ɛ]*, [e:]*	Baiser [bə'ze:], Trainer ['tre:nər, 'tre:nər]
ain*	[ɛ:], [ɛ]	Refrain [rə'frɛ:]
am*, an*	[ä:]	Estampe [ɛs'tä:p], Chance ['fä:sə]
au	[au]	Auge ['augə]
	[o:]*, [o]*	Sauce ['zo:sə], Chauvinist [fo-vi'nist]
äu	[ɔʏ]	Häuser ['hɔʏzər]
aw*	[o:], [ɔ:]	Yawl [jo:l, jo:l]
ay*	[aɪ]	Bayern ['baɪərn]
b	[b]	Ball [bal], Ebbe ['ɛbə]
	[p]	ab [ap], lebt [le:pt] (語末・子音前)
c*	[k]	Causa ['kauza]
	[ts]	Cäsar ['tse:zar]
	[tʃ]	Cello ['tʃɛlo]
	[s]	City ['siti]
ch	[ç]	ich [ɪç], Milch [mɪlç] (前舌母音・子音の後、一部外来語の語頭)
	[x]	Bach [bax] (a, o, u, au の後)
	[k]*	Chor [kor]
	[ʃ]*	Chef [ʃɛf]
	[tʃ]*	Couch [kaʊtʃ]
chs	[ks]	Ochse ['ɔksə] (s が語幹に属する場合)
ck	[k]	backen ['bakən]
d	[d]	du [du:], paddeln ['padəlɪn]
	[t]	Bad [bat:], widmen ['vɪtmən] (語末・子音前)
ds	[ts]	abends ['a:bənts]
dsch*	[dʒ]	Dschungel ['dʒʊŋəl]
dt	[t]	Stadt [ʃtat]
e	[ɛ]	Feld [felt]
	[e:]	leben ['le:bən]
	[e]	elegant [ele'gant]
	[ə]	Bitte ['bitə]

ea*	[i:] Team [ti:m] [e:] Steak [ste:k]	[ø] möblieren [mø'bli:rən]
eau*	[o:] Niveau [ni'vo:]	oa* [o:] Toast [to:st]
ee	[e:] See [ze:]	oe* [ø:] Goethe ['gø:tə]
ei*	[i:]* Jeep [dʒi:p]	oh [o:] Sohn [zo:n]
eh	[e:] Ehre ['e:rə]	öh [ø:] Söhne ['zø:nə]
ei	[ai] Ei [ai]	oi [ɔɪ] schwoien ['ʃvɔɪən]
ein*	[ē:], [ē] Teint [tē:]	[oa]* Toilette [toa'letə]
em*, en*	[ā:], [ā] Empire [ä'pi:r], Agrément [agre-'mä:]	oin* [œ:], [œ] Pointe [po'ē:tə]
eu	[ɔɪ] Leute ['lɔɪtə] [ø:]*, [ø]* Milieu [mili'ø:]	om*, on* [ō:], [ō] Komplet [kō'ple:], Bonbon [bō-'bō:]
ew*	[u:] Crew [kru:]	oo [o:] Boot [bo:t]
ey*	[ai] Meyer ['maiər] [i] Hockey ['hɔki]	[u:]* Boom [bu:m]
f	[f] fein [fain], Affe ['afə]	ou* [u:], [u] Route ['ru:tə]
g	[g] gut [gu:t], Flagge ['flagə] [k] Weg [ve:k], sagt [za:kt] (語末・子音前)	[au] out [aʊt]
	[ç] fleißig ['flaisɪç] (語末の -ig で)	ow* [au] Clown [klaʊn]
	[ʒ]* Garage [ga'ra:ʒə]	[o:] Bowle ['bo:lə]
	[dʒ]* Gin [dʒɪn]	oy* [ɔɪ] Boy [bɔɪ]
gli*	[lj] Passacaglia [pasa'kalja]	[oaɪ] loyal [loa'ja:l]
gn*	[nj], [ɲ] Bretagne [bre'tanjə, brə'taɲ]	p [p] Paß [pas], Suppe ['zupə]
h	[h] Haus [haus] [無音] Uhr [u:r], rauh [rau]	pf [pf] Pfanne ['pfanə]
i	[i] Bild [bɪlt] [i:] Bibel ['bi:bəl] [i] Mineral [mine'ra:l]	ph* [f] Physik [fy'zi:k]
	[ai]* Outsider ['aut-saɪdər]	qu [kv] Quelle ['kvɛlə]
	[i]* Bianca ['bjanka]	[k]* Quai [ke:]
ie	[i:] Liebe ['li:bə] [ɪ] Viertel ['fɪrtəl] [i] die [di] (冠詞) [iə]* Linie ['li:nia] (外来語のアクセントのない音節で)	r [r] Ruf [ru:f], Herr [hɛr]
ih	[i:] ihm [i:m]	rh* [r] Rhein [rain]
ill*	[j] taillieren [ta'ji:rən] [lj] Medaille [me'dalja]	s [z] sein [zain] (母音の前で)
im*, in*	[ē:], [ē] Timbre ['tē:bər], Gobelín [gobə-'lē:]	[s] aus [aus]
j	[j] ja [ja:] [ʒ]* Jury [ʒy'ri:] [dʒ]* Job [dʒɔb]	[ʃ] Spiel [ʃpi:l], Stein [ʃtaɪn] (語頭の sp-, st- で)
k	[k] kalt [kalt]	sch [ʃ] Schlaf [ʃla:f]
l	[l] Lippe ['lɪpə], fallen ['falən]	[sk]* Scherzo ['ʃkɛrtso]
ll*	[j] Vermillion [vermi'jɔ]	sh* [ʃ] Show [ʃo:]
	[lj] brillant [bril'jant]	ss, ß [s] wissen ['visən], weiß [vaɪs]
m	[m] mein [main], Lamm [lam]	t [t] Tat [tat], Kette ['kɛtə]
n	[n] nein [nain], dann [dan] [ŋ] sinken ['zɪŋkən] (nk のつづりで)	[ts]* Lektion [lekti'si:ɔ:n]
ng	[ŋ] lang [laŋ] [ŋg]* Pinguín ['piŋgwi:n]	tch* [tʃ] Match [mætʃ]
o	[ɔ] offen ['ɔfən] [o:] Ofen ['o:fən] [o] Apotheke [apo'te:kə]	th* [t] Thema ['te:ma]
ö	[œ] zwölf [tsvœlf] [ø:] Öl [ø:l]	[θ] Thriller ['θrɪlə]
		ts [ts] nichts [nɪçts]
		tsch [tʃ] deutsch [dɔɪtʃ]
		tz [ts] Satz [zats]
		u [u] Mutter ['mutər]
		[u:] Mut [mu:t]
		[u] Musik [mu'zi:k]
		[y:]* Revue [rə'vy:]
		[y]* Nocturne [nok'tɜrn]
		[a]*, [œ]*, [ʌ]* Cut [kat, kœt, kʌt]
		[ʊ]* Leu [leʊ]
		[u]* en suite [ã'suit]
		[v]* Biskuit [bis'kvi:t]
		ü [y] Hütte ['hytə]
		[y:] hüten ['hy:tən]
		[y] Büro [by'ro:]
		uh [u:] Kuh [ku:]
		üh [y:] kühl [ky:l]
		um*, un* [œ:], [œ] Parfum [par'fœ:], Verdun [ver-'dœ]
		v [f] Vater ['fa:tər]

	[v]*	Villa ['vɪlə] (母音の前)
w	[v]	Wein [vaɪn]
	[f]	Löwchen ['lœ:fçən] (語末・子音前)
	[w]*	Washington ['wəʃɪŋtən]
wh*	[v], [w]	Whisky ['vɪski, 'wɪski]
x	[ks]	Examen [ɛ'ksa:mən]
y*	[ʏ]	Rhythmus ['rɪtmʊs]
	[y:]	Mythos ['my:təs]

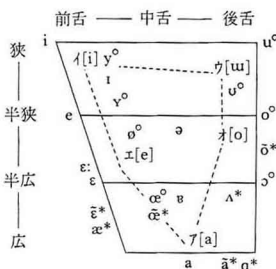
	[y]	Dynastie [dɪnas'ti:]
	[ar]	Nylon ['naɪlən]
	[i:]	Ysop ['i:zɒp]
	[i]	Party ['pa:ti]
	[j]	Yankee ['jɛŋki]
z	[ts]	Zahn [tsa:n], Skizze ['skɪtsə]
	[z]*	Gaze ['ga:zə]
	[s]*	Bronze ['brɔ:sə]

図 1 発音器官



- 1 唇 2 (門)歯 3 歯茎 4 硬口蓋 5 軟口蓋(特に後方のよく動く部分を口蓋帆ともいう) 6 口蓋垂(のどご) 7 咽頭 8 声帯・声門 9 喉頭
a 舌尖 b 前舌 c 中舌 d 後舌

図 2 ドイツ語と日本語の母音



* は外来語で用いられる。

ɐ は緩和された標準発音 (II 6a 参照) 及び外来語で用いられる。

カタカナは標準日本語の母音を示す。[] 内はその音声記号。

° は円唇を示す。ただし外来語音では省いてある。

日本語ではオ音が円唇となる。

図 3 ドイツ語の子音

		両唇音	歯唇音	歯・歯茎音	硬口蓋歯茎音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
閉鎖音	無声・硬	p		t			k		ʔ
	有声・軟	b		d			g		
摩擦音	無声・硬		f	θ*	s	ʃ	ç	x	h
	有声・軟		v	ð*	z	ʒ*	j	ʝ	
鼻音		m		n		ɲ*	ŋ		
側面音				l					
震音				r				R	
破擦音	無声	pf		ts	tʃ				
	有声				dʒ*				
無摩擦継続音						ʍ*	w*	(ともに両唇調音を伴う)	

* は外来語で用いられる子音。

ɐ は緩和された標準発音 (II 6a 参照) で用いられる。

□ は標準日本語に無い子音, □ は類似した音はあるが注意を要する子音。

声門閉鎖音 [ʔ] は語頭では普通記されない。必要な場合、本書では [j] を用いる。

ドイツ語音の表記では [R] も通常 [r] で表す。本書でもこれに従う。

装帧·插画 長沼 弘